

---

# 明日に祈る

翠

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

明日に祈る

### 【Zコード】

N4454A

### 【作者名】

翠

### 【あらすじ】

「あいつ」は・・・冴えない少年輝<sup>アキラ</sup>が夏休み一週間前、転校生にかけられた一言。「貴方も同じ。」それはどうゆう意味なのか。ひと夏の間に輝に何かが起きた。

## おの田（おのた）

いきなり一作目にして連載を作ってしましました。  
頑張つて、書いていきたいと思いますので、読んで頂けると嬉しい  
です。

## あの日

目に映るのは闇。

蒼く、深く、冷たく僕を包んで・・・。

この闇が僕は嫌いじゃない。

冷たくも、温かい。

ここはどこなんだろうか？

僕の中の闇か。それとも外の世界の闇か。  
どっちにしろ、ここは居心地がいい。

ずっとこの闇に包まれていきたい・・・。

そう願っていたのはいつだつただろうか。  
今となつては分からない。

もうあの夏の事など誰も覚えてはいない。

でも・・・、

それでも僕はある出来事を語らなくてはいけない気がするんだ。  
吸い込まれるような深い冷たい瞳を持った「あいつ」の事を・・・。

季節は夏。

じつとりとした汗の臭いが気になるこの季節。

僕は中学校、最後の夏休みを迎えるようとしていた。

「おい！あきひ輝！」

後ろから鈴木の声が僕を呼び止めた。

「ああ、おはよう。」

普通に返すと肩を叩かれた。

「あのなあ、そりやないだろ？せめて朝ぐらテンション上げろよ  
！」

鈴木は中学生になつてからの親友だ。

冴えない僕をなぜか気に入ってくれた唯一の奴だ。

鈴木は別に特別かつこいいわけじゃないけど、氣のいい奴で、話も

面白いし、何だかんだ言つて、クラスでも人気がある方だ。でも気取つてる素振りはこれっぽちもなくて、そこが僕は好きだ。

それに比べて僕は一応勉強が出来るくらいで、そんなに皆の気に止まるような特技もないし、

話すのも得意じゃないし、あえて言つなら、人の話を聞くのは得意なほうだけど。それに、

顔もいいわけじゃない。ブサイクってわけじゃないけど、かつこいいとは言えない。絶対に。

身長も極一般的だし。走りも速くない。まあ、気にしてないけど。

今日は夏休み一週間前。

蝉がうるさい。

今年の夏休みも暑くなりそうだ。

吸い込まれそうな青空を見上げてそんなことを思つてゐると鈴木にこづかれた。

「お前、人の話聞いてんのかよ？」

「ああ、ごめん。何の話だっけ？」

「どうから聞いてなかつたんだよ？」

「・・・たぶん全部。」

「やつぱし？」

「ごめん。」

「まあ、いいけどさ。俺が話してたのは転校生の事。なんかうちのクラスに来るらしいんだけど、なんでまたこんな時期に転校かねえ。大変だよなあ。」

鈴木は頭の上で腕を組むとそう言つた。

「でも、一週間来れば休みだし。いいんじゃないかな。」

「お前の感想には拍手を贈りたくなるよ。普通、気になるところ違えだろ？」

「なんか問題でもあるつけ？」

鈴木は呆れたように首を振るといつて言つた。

「一、男か女か。二、女だったら可愛い子か。」の一つしかないだ

うーー?」

ああ、やつこいつ」と。

「別に興味ないし。」

「お前さあ、顔悪くないんだからその喋り方どうにかして服装も手  
え加えて、もうちょっと他 人のことも気にしようぜ。特に今年で  
中学最後の夏休み前だぜ? 彼女くらい欲しくなるだ  
ろ?」

「・・・」

黙つて空を見上げるしかなかつた。

でも、転校生には少し興味があるかも・・・。

一体どんな子だろうか?

まあ、どうせ僕なんかが言葉を交わすことはないだろうけど。  
それでも、やはり少し気になつたまま教室に向かつた。

夏は暑かつた。

教室は暑苦しかつた。

汗の臭いが気になつた。

でも、

そんな教室が「あいつ」が入ってきた瞬間、僕は言いようのない冷  
たさと苦しみにも似た寂しさを感じた。

この日、僕は「あいつ」と出会つた。

あの日（後書き）

どうでしたでしょうか?  
是非、ご意見・ご感想、お聞かせください。  
これからも頑張ります。

## 扉の前（前書き）

予定より長くなってしまいそうです・・・。  
まだまだ未熟ですが読んでいただけたと嬉しいです。

## 扉の前

体が煮えて溶けてしまいなこの蒸し暑い空間。  
制服の袖を巻くりあげ、流れる汗を拭う。  
誰もがやる気を失っていた。

一瞬、僕は「あいつ」と田が合つた・・・。  
体中が凍つてしまつたかのようだつた。

冷たい瞳。

夏の夜空をそのまま全て吸い込んでしまつたかのような澄んだ瞳。  
肩のあたりで揃えてある茶色がかつた髪。  
スラつとした体つき・・・。全てに。  
彼女の存在全てに、存在そのものに僕は吸い込まれた。

転校生・・・。  
夜空 零  
ヨツク レイ

黒板に白く浮かび上がる文字。

担任が口を開いて初めて他の生徒の声が聞こえてきた。

「今日からこの学校に通うことになつた夜空 零さんだ。

こんな時期に大変だつたとは思うが家庭の事情でこの地区に引っ越しすることになった。

皆、宜しく頼むぞ。じゃ、零さん自己紹介を・・・

担任が口を閉じると皆、目だけ彼女の方へ向けた。

夜空 零が一步前へ踏み出した。

「夜空 零です。宜しくお願ひします。」

それだけ言い終えるとゆつくりとお辞儀をし、元の位置に戻つた。

「零さんの席は岸辺の、あの窓側の後ろから一番田の奴だ、の隣な。

」

夜空 零は僕の斜め左前に静かに腰を下ろした。

僕は彼女の姿を信じられない気持ちで眺めていた。

こんなにも冷たく、美しい人がいるなんて知らなかつた……  
こんなにも哀しい瞳を持った人が存在するなんて……。  
呆然と見つめていると夜空 零が振り返り僕を見た。  
慌てて視線を逸らそうとしたが出来なかつた。

夜空 零は僕を見つめたまま囁くような声でこう言った。

「貴方も同じ……？」

それだけ言つと視線を外し、元の向きに戻つた。

僕は固まつたまま動けなかつた。

「貴方も同じ……？」どうゆう意味だよ……。

こうして僕はあいつと出会つた。

この日を境に僕を取り巻く世界が一変し始めた。  
もう、僕はここから抜け出すことは出来ない。  
それはこれからも変わることは無いだろう。  
一生。

## 扉の前（後書き）

読んでいただき有難うござります。  
これからも頑張つて書いていきますのでよろしくお願いします。  
ご意見・ご感想お待ちしています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4454a/>

---

明日に祈る

2010年12月22日02時35分発行